入間地区退職校長会会報

いるま

第43号

令和6年2月1日発行

題字・発行者
会長　比留間 英雄

子供たちに輝く未来を託して

副会長　西澤 泰男

今年度入間地区の副会長になりました入間班の西澤です。微力ながら、会長をはじめ役員の皆さんと共に、当会の活動を盛り上げていきたいと思います。

さて、家康公の名言の一つに「水よく船を浮かべ、水よく船を覆す。ただこのことを、よく心得られよ」があります。

武家社会は庶民が居て成り立っている。この道理をよくわきまえ、庶民を軽んじることなく常に重んじなさい、という武士への戒めの言葉であり、江戸時代二百六十年間を支えた原点といえます。

では戦後の日本の教育は今まで順風満帆であったでしょうか。学校や教師という船は傾きかけなかったでしょうか。

私の教員時代を振り返るとバブル景気に沸き、大量生産と消費が美徳とされ、プレハブ校舎が立ち並ぶ、教育の工場化時代。次に校内暴力、生徒指導、不登校生徒の増加。さらにいじめ問題へと広がり、保護者や地域、行政や警察等とも連携して、子供たちを必死になって守ってきました。

そして価値観の多様性が叫ばれる中、学校は集団から個への指導や支援の充実へと、大きく舵を切ってきました。

またIT社会の出現は、この国の学びの在り方を急激に変え、教室という一定の枠から飛び出し、「何時でも何処でも、誰とでも学び合える」時代に向かっていきました。

コロナ禍では、人と人との距離を置き、マスクで個々の感情すら押し隠し、給食の時間には「孤食、黙食」が推奨された、等々。新たな学びの危機もみえつつあります。

日々の多様な課題を乗り越えるには、教師が先見性を磨き、子供たちが学びたくなる学習の場を求めていくことが、大事であると思います。

私たちも現職校長会等と一緒に、未来に活躍する子供たちの育成を支えてまいります。

品格と風格

入間地区小学校長会
会長　戸村 達男

現在勤務している学校は、二回目の在籍です。約三十年前に教諭として勤務していた学校に、校長として着任するという幸せな経験をさせていただいています。校長室に掲額されている写真は、お世話になった校長先生ばかり。

「あの頃、生意気盛りだった自分を、校長先生はどう思っていらっしゃったんだろう。」

「あの校長先生は、この校長室で、何を考え、どんな策を練っていたんだろう。」

「文部省の研究委嘱のような大きなお仕事をされていた時、さぞや大きなプレッシャーを感じながらこの椅子に座っていらっしゃったに違いない。」

何より、当時の校長先生方にあって自分にはないもの、それは品格・風格です。自分も人間性を磨き、諸先輩方に恥ずかしくないような品格・風格を身にまとえるようにならなくては、と思います。

時代は変わり、校長に求められる役割も変わってきました。「校長の出番は一番最後」と言っていたのは一昔前の話。今は、状況を正確に把握し、役割分担、スピーディーな対応の指示といった、適切な初期対応を先頭に立って行うリーダーシップが求められます。保護者との面談も、初めから校長が同席した方がうまくいくケースが多いようです。

教職員の育成も主流はコーチング。将来の教員像を自分で考えさせ、その成長への道筋を一緒に考えるというスタイルが、今の若い教職員には合っているように感じます。

しかし変わらず大切なのは、一校を預かるという覚悟と気概。そして子どもたちや保護者・地域の方々から「さすが校長先生」と言われる人間性、品格・風格だと思います。入間地区退職校長会の諸先輩方のお姿を思いうかべ、そして校長室の写真を仰ぎながら、今日も精進いたします。

（所沢市立所沢小学校）

協議会 開催される

期日　令和５年11月７日(火)
会場　入間市産業文化センター

今年度の教育推進研究協議会は、入間市退職校長会が担当し、入間市産業文化センターにおいて盛大に開催されました。

来賓二名、小学校長四十七名、中学校長三十五名、退職校長六十五名の百四十九名が一堂に会し、三名の研究発表と研究協議が行われました。

開会行事では、比留間英雄会長から教育推進研究協議会を通して、退職校長と現職校長が互いに学び合い協同し合うことの大切さ等の示唆を頂きました。来賓の井上清顧問からは、研究協議会の意義だけでなく当班の運営面に対し心温まる言葉を頂きました。また、中田一平入間市教育長からは、入間市の教育行政の新たな取り組みの成果と課題等の話を頂きました。

挨拶する比留間英雄会長

研究発表では、川越市立川越第一小学校校長 山田勇先生から「五つの柱を充実させ 学校力を高める」、所沢市立山口中学校校長 諸範弘先生から「誰もが居場所のある学校」と題して、着実に成果を上げている教育実践の報告がありました。

退職校長会からは、入間東部班の熊谷洋興氏が長年にわたって調査・研究されてきた「郷土の文化遺産火工廠を語り継ぐ」のテーマで発表予定でしたが、事情により入間東部班代表理事の山田幸次氏による紙面発表となりました。熊谷氏から直接拝聴できなかったのは非常に残念でしたが、研究成果は参加者全員、確実に受け止めることができたと思います。

最後に、比留間会長より

・課題解決学習と振り返りの定着
・家庭の多様化に対応する家庭学習の個別化の対応
・教室環境、外部講師の重要性
・居場所づくりの具体的な方策と生徒一人一人の特性を生かした取組
・ふじみ野市火工廠の他、県内には旧軍事施設が多くあったことを知り、戦争の爪痕から平和を考えたいこと

等、具体的に指導講評を頂きました。

懇親会はコロナ感染予防のため、残念ながら中止となりました。

（文責　入間班　飯國 治）

五つの柱を充実させ 学校力を高める

川越市立川越第一小学校
校長　山田　勇

Ⅰ本校の概要

・児童数六六七人　学級数二四クラス（通常二一、特別支援三）
・百五十一年目の歴史と伝統
・川越城内に位置し、周りに多くの文化施設が点在

Ⅱ学校教育目標「四つのだいじ」

・地域、保護者、子供たちに浸透している

Ⅲ学校教育目標を具現化する五つの柱（本年度の特に重点とする取り組みを紹介）

1 学年・学級経営の充実
・児童理解と信頼関係の構築
・いじめのない人間関係作り
・どの子も活きる、取りこぼさない学習支援室の設置

2 授業の充実と学習環境の整備
・学び合う・高め合う・鍛え合う授業の実践（川越スタンダードの定着と発展）
・家庭学習の充実
・個別最適化を図る電子ドリル
・ユニバーサルデザインに基づく教室環境の整備

3 校内研究の充実
・委嘱研究への取り組み
「自信をもって発信できる児童の育成（三年次）」と確実な成果
・年十回の若手塾の開始
ベテラン教諭から若手へ
・年次研修発表会
若手の発表を聞き、互いに切磋琢磨する環境

4 児童の安全確保と環境整備

5 家庭・地域・校種間連携の強化
・中学校の実践を手本とした無言清掃への取り組み
・学校運営協議会を活用した交通指導員の増員・安全ボランティアの拡充、地域を巻き込んだ環境整備

Ⅳ今年度の成果と課題

（成果）業務の方向性を正し、働き方改革を進める
全国・県平均を遙かに超える学力の向上

（課題）不登校児童の解消

対話的な学びを重視し、発信力を鍛える

「彩の国教育の日」協賛　教育推進研究

誰もが居場所のある学校

所沢市立山口中学校
校長　諸　範　弘

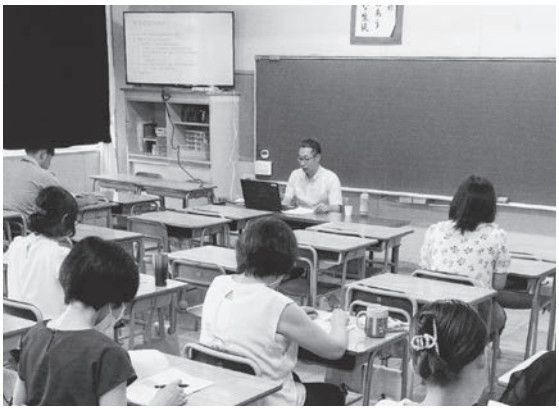
本校の目指す学校像は、「誰もが居場所のある山口中学校」です。障害のある生徒や障害のあることが周囲から認識されていないものの学習上または生活上の困難のある生徒を含むすべての生徒にとって、適切な指導や支援を行うことを目指しています。

個別の教育的ニーズを把握するための取り組みとして、小学校での生活状況、生徒や保護者との面談、授業や生活の状況等を踏まえ、配慮が必要な生徒の実態把握を行っています。（十三カテゴリに分類）

配慮を要する生徒については、個別のケース会議によりチームとしての情報共有と個人に必要な合理的配慮に係る検討を行います。（必要に応じて学校相談医、子ども相談センター、児童相談所等の職員を招聘しています。）

すべての生徒に適切な指導や支援を行うために、教職員の自己評価シートに「すべての生徒に『ねらい・やり方・成果』がわかる授業の創造」に係る方策（ユニバーサルデザインの視点による授業、生徒の特性に応じた個別指導、ICTの活用等）を設定しています。

また、教室環境の工夫（戸棚の目隠し等）、教育環境の工夫（ジェンダーに配慮した制服やトイレ、クールダウン用の居場所づくり）なども行っています。


学校相談医による校内研修

認知特性や学力特性のある生徒、対人関係や集団への適応が難しい生徒などのうち、必要な条件を満たす生徒は、通級指導教室で指導を行っています。

所沢市学校相談医と連携し、保護者の希望に応じて生徒を医療につなげます。外部機関と連携し、病院や大学から講師を招き、発達障害等に係る校内研修を推進しています。これからも、すべての生徒が、山口中学校に自分の居場所があると思える学校をつくるために、生徒一人一人の特性を理解し個人に必要な合理的配慮を提供するための仕組みづくりを推進してまいります。

郷土の文化遺産　火工廠を語り継ぐ

入間東部班　熊　谷　洋　興

平成十七年十月、上福岡市と大井町が合併し、ふじみ野市が誕生しました。団地、企業の進出を機に発展を続けています。この土地が旧陸軍の跡地であるという事を知る人はほとんどいません。

火工廠は昭和十二年から敗戦後の二十二年まで、旧福岡村にあった陸軍の兵器工場で、正式名は陸軍造兵廠川越製造所と言います。約五十五㌶の広大な敷地に七百棟の建物と七千人余りが働いていました。

福岡村に軍事施設をつくるため土地の収用が軍により進められました。農地の買い占めに農民は生活ができなくなると反対運動を興こしました。しかし、軍の力には勝てず、消滅してしまいました。

火工廠の昔の姿をとどめる遺跡が上野台小学校北側にありました。高さ二十七㍍の給水塔（水槽塔）です。平成十四年に保存運動が行われましたが七年後に徹去されてしまいました。同時に市内小学校の社会科副読本からも削除されて、火工廠の存在が忘れられる大きな原因となりました。

平成二十九年八月『火工廠物語』再販の会を発足させ火工廠の存在を広く普及させることにしました。

『火工廠物語』は、市内在住の富田竹雄氏が自身の記憶や当時の従業員からの聞き取り調査などから、火工廠の実態を記録した貴重な本であり、戦争遺跡の役目を担っています。火工廠が戦争の一つであったという事実を伝えています。再版本五百冊を作成し図書館などの公共施設へ無償で配布、他は一冊千六百円で販売。そのうち二百円を震災遺児支援に当てる活動も併行して実施継続中です。

令和三年九月、一歩進めて火工廠を語り継ぐ会を発足。郷土の歴史、命と平和の尊さを学ぶ社会科副読本への再掲載、残る火工廠遺跡の発掘、講演会等の啓発を通し、火工廠を郷土の歴史遺産として語り継いでまいります。

展示会にて

班だより

持続可能な学びと交流を

日高班　野口　忠

日高班は、会員数四十三名の組織です。鯉沼文夫会長を中心に九名の役員で運営にあたっています。今年はどの行事も、久しぶりに対面で行いました。以下、主な年間の活動について報告します。

一　春の総会と懇親会

四月十五日に実施しました。昨年度の報告、役員改選、今年度の活動等について協議した後に、久々に懇親の場を設けました。

二　夏の研修会と懇親会

八月五日に実施しました。日高市退職校長会前会長の橋口政昭氏に「退職その後」と題して講演していただきました。氏の退職後の、福祉施設の勤務、国の科学技術振興機構での理科支援員配置事業への関わり、また、地元の小学校での理科支援員の取組等、様々な場所での活動を伺い、氏の熱い思いを感じることが出来ました。

渋沢栄一記念館にて

三　秋の研修旅行

十月十三日に、深谷の渋沢栄一記念館、尾高惇忠生家、諏訪神社、旧渋沢邸「中の家」を訪ねました。

日高には、幕末の飯能戦争の折、渋沢成一郎や尾高惇忠らを匿い逃亡の手助けをした記録もあり、（詳細は「飯能戦争秘話」「横手の三義人」「助けてやらにゃあ」に記されています）。渋沢家、尾高家が一層身近に感じられました。

四　冬の研修会と懇親会

十二月九日に、地元郷土史家の入江武男氏に「日高市の偉人たちとその業績」と題して講演していただきました。製茶機械の発明者高林謙三、明治初期の医学者 桑田衡平、プランクトン学の研究者 小久保清治、西洋画家の玉之内満雄の四氏について話して頂き、郷土の偉人について認識を新たにすることが出来ました。

これらの活動を通して、会員相互の交流が復活し、活動への意欲も高まってきました。

これからも、持続可能な学びと交流を目指して取り組んでいきたいと思います。

教育を語る会「学校との絆づくり」

狭山班　横井三朗

狭山班は退職校長会会員と市内現職校長が膝を交えて教育問題を語り合う「教育を語る会」を実施している。回を重ね本年度は十四回目を迎える。

自己啓発と会員相互の親睦を目的とした「教育を語る会」であるが、市内小中学校長の声を聴く貴重な機会でもある。

毎年、二名の方に発表していただき、その後意見交換を行う。内容は「生きがい作り」「再任用での苦労話」「人生論」など多岐にわたる。

狭山班は以前から学校との連携を活動の一つの柱としてきたが、このコロナ禍で活動は中断し十分な活動ができなかった。

定年延長、管理職志望者の減少、教員不足、いじめ不登校など様々な学校課題を抱えている。また、デジタル社会への急速な変貌の中で、学校との情報の共有化はもとより、「心の絆」を広げ、活動の見直しを図ろうとしている。

その中で、次のような声が聞かれた。

「学校との連携を深める具体的手立てが必要ですね。」

「現職に語ってもらい直接学校の話を聴くのは大事ですよ。」

この「教育を語る会」の継続で学校との関係を「情報連携」から「行動連携」の関係に発展させたいと考える。

学校の現場においても、部活動の外部指導者の招聘、授業への外部講師の活用など、学校独自の諸活動は活発に展開されている。ただ、このような活動も校長や教職員の個人の努力に任されている傾向にある。また、関係諸機関との連携が組織的、継続的に進められることを可能にするシステム作りには、解決すべき課題が山積みである。

冒頭に述べたように、膝を交えて先ずは「のめっこい」関係づくりから、ハード面、ソフト面でも充実発展させる入口として、来たる二月の開催に向け準備中である。

「教育を語る会」の風景

生きがい

やりがいは生きがい

狭山　金子弘之

学校教育に関わる仕事を終え、次のステージでは、全く違う世界の仕事をしてみたいと希望し、今の「やりがい」のある職業に出会うことが出来ました。

それは、自宅から車で十五分ほどの所にある「狭山乗馬センター」で、馬の世話をする仕事です。

厩舎内の馬房掃除や、鞍置き場掃除等を行っています。

週一日の定休日と、大晦日と元日だけがお休みです。

早朝六時過ぎから作業を始めます。今まで三年半で担当した馬は十五頭です。ここ数か月は、三頭の世話をしています。

このセンターにいる馬は、多くがサラブレッドで、キングカメハメハ、クロフネ、ステイゴールド、ハーツクライ、ディープインパクト産駒等の元競走馬です。

それでは、「馬房掃除」を手順に沿って説明します。

お掃除、お願いします

①必ず「おはよう」と声をかけます。馬は声や足音を覚えてくれるので反応します。②無口という馬具を着けて、外の洗い場に移動させます。③熊手やフォークを使いボロ（馬糞）をかき集めて、二輪台車に移します。④尿で汚れたオガクズを、スコップ等でかき集めて二輪台車に移します。⑤全体をフォークと竹箒等で、綺麗にならします。⑥二輪台車を堆肥場に運び除糞します。⑦新しいオガクズを馬房に運び、均等に敷き詰めます。⑧最後に馬を戻します。

これで一頭分が終了します。特に気を付けることは、ボロの状態を確認することです。馬の健康状態を表すバロメーターになるからです。そしてもう一つは、足を踏まれたり手をかまれたりしないように注意することです。

馬房掃除がひと通り終わったら、鞍置場等のはき掃除を行い、十時半過ぎには帰宅します。

新しいことにチャレンジする喜びや、張り合いを感じている日々です。まだ七十歳、がんばります。

ウメの栽培に挑戦

越生　吉澤　勝

はじめに

私の家は、関東三大梅林の越生梅林の近くにあります。

現在のようなウメの栽培は祖父の代から始めました。おもに「白加賀」「べに梅」「十郎」という品種を栽培し出荷してきました。

私自身がウメの栽培を決心したのは定年が近くなってからです。やるからには、「越生のウメ」の名に恥ずかしくないウメを生産したいと思って取り組んでいます。

新しいウメの木

定年をした年の秋に、新しく十本のウメの苗を植えました。梅干し用の「十郎」という品種です。南高梅に似ています。現在、植樹して十年が経ち、収穫量も安定し、大きなウメの実をつけてくれました。良いウメを生産するためには、剪定（枝を切る）という大事な作業があります。この作業は経験と栽培知識が必要です。太陽の光をしっかり浴びられるように幹や枝を整え、収穫しやすいように木を低くつくります。なかなか上手くできないのが現実です。他にも、ここではご紹介できないのですが、剪定した枝はチップにして肥料に活用しています。

退職の年に植樹したウメの木（2013.11）

これから

令和元年に、古い白加賀の近くに二十本の新しい白加賀の苗を植えました。順調に成長しています。近年は、五月、六月の収穫時から暑い日が続き栽培が大変難しくなっています。これからも、変化に対応したウメの栽培に挑戦していきたいと思います。

会員の声

必要とされることの喜び

飯能　渡邉泰典

令和四年、郷里秩父市に金土日の三日間だけ食事や珈琲を提供する店・花風里（かぷり）を開きました。当店は午前午後一組ずつの完全予約貸し切り制で、だれにも気兼せずゆっくり食事をお楽しみいただくことを目的としています。

実は私自身が父や母、叔母を介護した経験から高齢者や障害のある方が安心して利用できる店のないことに不便を感じていました。そこで、車イス生活だった母のために建てたバリアフリーの実家を使い、妻と二人でこのような店を始めたのです。開店一周年を迎えた今、宣伝はしていませんがご利用いただいた方の口伝えで年間七百余名もの方にご来店いただいています。今は皆様から「このような店を作ってもらってありがたい」とのお言葉をいただくことがこの上ない喜びとなっています。毎週居住する飯能市と店との往復ですが、必要とされることの喜びを糧に続けていきたいと思っています。

誇りに思う

入間東部　山口尚人

高齢になり、日々、趣味のテニスや読書などで過ごしている。

退職後の読書は、自分の教えていた教科とは無関係の日本の歴史に関するものとなった。はじめに、古代から現代までを通して読み、最近は他の歴史書にも手を出している。最近読んだケント・ギルバートさんの本の中に「日本は最高に住みやすい国、この国に住む人は、礼儀正しく、真面目で、働き者で、圧倒的に思いやりのある人達だ」と書かれている。こういうことばに出会うと大変うれしく、日本は世界に誇れる素晴らしい国であると感じている。

最近のスポーツ界の日本人選手の活躍には目を見張るものがある。かつては大事な試合になるとプレッシャーがかかり結果を残すことができなかったが、今や逆である。

この若者達を育て上げたのは、近年の日本の教育の成果であると思いたいが。

教員を目指す若者と…

所沢　岩間健一

再任用校長として二年間勤務をさせていただき、四月からは大学で、主に小学校教員を目指す学生の指導に携わっています。

教員という職の負の部分が強く伝わってくる昨今です。それは、今の教育の体制や制度をよい方向に変えていく一つの原動力になるという側面もあります。しかし、これからの教員を目指す若者が負の情報で判断し、教職の道から退いてしまうことが心配です。教職には、他の職では味わえない魅力や「やりがい」があることは、間違いないと思っています。

基本的には、真面目に物事に当たる学生が多く、まだまだ捨てたものではないという思いを持っています。教員志願者確保のため、矢継ぎ早に様々な策が出ている昨今ですが、問題の本質はもっと違うところにあると、長年教育に携わってきた多くの方は思っているのではないでしょうか。

茶道

入間　塩野育子

還暦を過ぎ六十の手習いで再び茶道を始めました。茶室の静寂、湯の音、キーンと張り詰めた空気等で素敵な時間に浸れます。

お稽古の前日には復習を繰り返し当日に臨みますが、いざ本番になると頭の中は真っ白でぎこちない所作になり、情けない始末です。

帰宅後に、お点前の順序、ポイントを絵や文でノートにまとめるのも一仕事となります。

そして、この茶道に惹かれるのは、問答での和歌、歴史、茶わん、和菓子、掛軸、お花等多岐に亘り学べ、心をゆさぶられるからです。今までの心の渇きが自身に深く染み込み、それが魂を震えさせているからだと一人酔いしれています。

書き残されたものがなく、人から人へと伝授されてきたこの茶道の価値を重く感じ、古き時代にふれつつ今の時代の「今」に気持ちを集中させたいと思うこの頃です。

花の名前を知る喜び

川越　小野勝弘

三年前、孫のユーチューブを見た。そこには、スノボーを華麗に滑る姿が映っていた。小学校三年生とは思えない出来栄えの動画に驚かされた。

六十五歳になり、ウォーキング中に見られる小さな花の名前を調べるため、コンパクトカメラを購入し、花の写真を撮り始めた。そんな時に、孫のユーチューブを見た。チャレンジしてみようと思い、短い動画を作り、ユーチューブに投稿した。チャンネル登録者が一名になったときはとてもうれしかった。

現在の登録者数百三十三、登録動画十三本になり、うれしいコメントもいただけるようになった。花の名前を調べてみると、その花の美しさやつくりの不思議さに驚

かされる。そして、その花と出会えてよかったという喜びを感じる。

気力と体力と伴走

毛呂山　清水宅郎

六十歳の定年退職時に地域のマラソンクラブの方からお誘いの声をかけて頂き、加入しました。私は決して走ることが得意でも好きな訳でもありませんでした。どちらかと言えば苦手で、まして退職後に長距離を走るなど考えてもいませんでした。しかし、折角のお誘いなので、何回か参加してみようという気持ちがきっかけで、七十歳に至る現在まで継続しています。

所属しているクラブに視力に障害のある方が在籍し、数名が交代で伴走をしています。私も加入して数年経過後に伴走をさせて頂くことになりました。伴走するには、伴走するだけの気力と体力（走力）が必要になります。いつまで伴走ができるか分かりませんが、気力と体力がある限り、これからも伴走を続けさせてもらいたいと思っています。

善光寺参りで思ったこと

狭山　川那子文雄

先日、いつかはお参りしたいと思っていた善光寺に行ってきました。善光寺は無宗派の単立仏教寺院でご本尊は絶対秘仏であり、善光寺の住職でさえ一生目にすることはできないと言われています。そのような予習をして善光寺を訪れて、まず目についたのは、壮大な本堂の伽藍です。まさに絶対秘仏を安置するのにふさわしい威容を誇っていました。

また、善光寺は宗派を超えてすべての人々を受け入れてきたと聞きます。だからこそ「一生に一度は善光寺参り」と言われているのでしょう。厳かな雰囲気の本堂の中にたたずむと、温かな、優しい気持ちになってきました。

今回、善光寺へお参りをさせていただき、私もすべての人々を受け入れるという広い心をもって日々生活できるようになりたいと思いました。

魔法の言葉

日高　北野　哲

本年三月末で辞めたのが私立高校の仕事と喫煙。四月以降に始めたのが新聞コラムの書き取りとノルディック・ウオーキング（以下N・W）。今そのN・Wにはまりつつあるから面白い。

私が参加しているノルディック・IRUMAは、①日高市在住は私だけ、学校関係出身者も同様だ。②活動は稲荷山公園を拠点に週二回午前九時から二時間。入間川小・中学校やその先まで歩くこともある。ポールを使う全身運動でかなり心地よい。③会員の意欲や体調が第一で出席も強要されない。④自治体イベント等へ協力、社会貢献もある。

この頃、週二回の活動日以外に自主練する六十七歳の私。クラブ代表からの「北野さんがクラブで一番若い」。娘からの「少し痩せた？」が、魔法の言葉になっているような気がする。

多文化共生社会の実現を

所沢　石川文典

本年度より市内小・中学校の日本語指導に携わっている。日本語指導が必要な児童生徒数は、五万人（一万人は日本国籍）を超え、埼玉県は全国でも五番目に多い。

その子どもたちの抱えている課題も多岐にわたっている。日常のやり取りが難しい子どもたちへの初期指導。日常会話には問題がないようにみえても、教科内容の理解や日本語の読み書きに課題を残す子ども。母語などの日本語以外の言語をどう位置付け、伸ばしていけるかも容易ではない。さらに、ルーツが違うということに対する寛容度の低い環境もある。

早稲田大学の池上教授は、こう投げかけている。「日本語指導の目標は『日本語が上手な子ども』を育てることですか」。

ＳＤＧｓ４の「質の高い教育をみんなに」「誰一人取り残さない」を胸に奮闘している日々である。

日日是好日

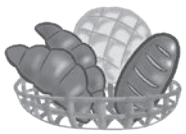
川越　宮崎洋子

定年退職したのだから違う世界へいきたいと思い、まずはパン作りに挑戦した。

調理台には先生一人と生徒五人が集まり、それぞれにレシピがあった。材料を揃えると、次の手順を教えてくれた。五人が違うパンを焼いたが、同じ時間に仕上がった。五種類のパンを同時に作らせるのだから、合理的な指導法だなと感じた。

また、家にいると話す機会が少なくなり、声を出さなくてすむ。これではいけないと、民謡を習うことにした。そこで、思いっきり声を出すことができ、すっきりした気分になれた。九十歳の先生は、三味線の伴奏や歌詞は全部暗譜していてすごいなと思う。姿勢も良く本当に若々しい。自分も先生のように年をとりたいと思っている。

ただのおばさんとなり、気楽に日々を大切に生きていこうと思うこの頃である。



作品の窓 写真

「ニライカナイへ誘う道」
狭山　前原 辰信

「河津の桜」
狭山　植松 寿広

「神業」
入間東部　深澤 俊二

「夜明けの向日葵畑」
日高　平井 斉

「我が家のサボテン」
川越　飯嶌 晴美

「花頭窓にも桜咲き」
飯能　冨澤 武男

編集後記

令和六年の春を迎えました。今年は辰年。昇龍の如く、皆様の益々のご健康をお祈り致します。

昨年からコロナウイルス対策の扱いが5類に引き下げられ、世の中は人と人との行き来が活発になり、本会の各班での活動も対面での活動が増してきました。

とは言え、充分に終息した訳ではないので安心は出来ません。

また、ウクライナへのロシアの侵攻に続き、中東でも紛争があり、日本の周辺も予断を許さない状況にあります。平和のありがたさと、平和を守るために何が出来るのだろうかと、改めて考えさせられる日々です。

このような中でも、本会は持続可能な活動を進めております。

ここに会報四十三号をお届けします。教育推進研究協議会をはじめ、本会の活動の情報提供や、会員相互の親睦と交流を図るための原稿、作品をお寄せいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。（野口）

入間地区退職校長会会報
第四十三号

発　行　令和六年二月一日
発行者　会長　比留間英雄
　　越生町成瀬一四一－一
印刷所　六三四堂印刷株式会社